

発行：株式会社リンク・インタラクティブ
 担当：事業統括部 商品開発ユニット
 住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
 TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：marketing@interac.co.jp



地域と共に創る新しい学校 浪江町立なみえ創成小中学校の試み

福島・浪江町教育委員会

福島県の「浜通り」と呼ばれる沿岸部北部の町、双葉郡浪江町。2018年に開校した町立なみえ創成小学校・中学校は、地域が一つになって新たな学校づくりを目指す施設併設型の小学校・中学校です。復興のシンボルとして、『ここに集う子どもたちだからこそ創り出せる学び』を理念に、さまざまな教育活動が展開されています。旧浪江中学校の校長として、そして今は教育長として町の教育復興に力を注いでいる笠井淳一教育長にお話をうかがいました。

なみえ創成小学校・中学校 開校までの道のり

2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故により、住民は2011年以来、全町避難生活を余儀なくされ、約1,700人の児童生徒が通っていた6小学校、3中学校はすべて臨時休校となりました。その後、避難先である二本松市で浪江小学校と、浪江中学校、後に津島小学校が廃校舎を活用して学校を再開し、子どもたちは郷土を学ぶ「ふるさと学習」に取り組んできました。

2016年10月、浪江町教育委員会は避難区域解除後の学校再開に向けた検討委員会を設置し、復興に向けた学校のあり方を検討。2017年3月に町内約2割に一部避難指示が解除され、町民の帰還が始まりました。それに合わせ2018年4月、浪江東中学校の校舎を改修し「なみえ創成小学校・中学校」が新規開校したのです。

検討会やパブリックコメントを通じた地域の人々の思いを、笠井教育長はこう振り返ります。「学校と地域全体が一体となって新しい学校を創ってほしい、という意見、子どもたちの成長を願う気持ちが多数寄せられました。そこから創成という校名が選ばれました。町内6地区が一体となったまちづくりの観点から“なみえ”とひらがなで表すことにしました。“なかよく・みんな・えがおで”のキャッチフレーズにもつながっています」。笠井教育長は浪江町の出身。避難先での浪江中学校



浪江町教育委員会 笠井淳一教育長

校長を務め、帰還から開校まで、教育分野での復興に携わってきました。

開校からまもなく5年目の春を迎えます。当初、小学生8人、中学生2人だった児童生徒は、2021年度は小学生22人、中学生9人に増えています。同じ敷地にある「浪江にじいろこども園」には29人の子どもが在籍しており、今後も児童生徒数の増加が見込まれます。

人工芝の校庭や、体育館、クラブハウスはスポーツなどの利用に地域開放されており、創成小中は、学校教育の枠を超え、子どもから大人まで全世代をつなぐ「教育エリア」としての機能を果たすようになってきています。

伝統工芸からドローンまで 新たな「ふるさと」の学び

同校の教育活動の特色は、各地区の学校の実績や歴史、文化、そして避難先の再開校のよさを引き継ぎ、地域と一体となった活動を展開している点です。

その一つが総合的な学習の時間を活用した探究的学習「ふるさと創造学」です。震災前から、町内の各校では郷土学習に取り組んでいましたが、震災後、その意味は一変しました。避難先の再開校で、浪江町の文化や伝統を再発見し、自分たちの生まれ育ったふるさとの記憶、そして震災の経験を風化させない「ふるさとなみえ科」として位置づけたのです。

しかし、震災から10年経ち、子どもたちは浪江町での生活経験が少ない、また震災そのものを知らない世代に移っています。帰還住民のほか、復興事業に伴い県外から転入する住民も増加し、すでに在校生の3分の1は、そうした世帯の子どもたちだそうです。そこで「全員が浪江のことを、これから学ぶという気持ちで」歴史や文化のみならず、地域復興や次世代産業の視点も取り入れた学習活動を進め、未来を切り拓く力と、ふるさとへの誇りを育むことを狙いとしています。

伝統工芸である大堀相馬焼を体験したり、漁業や農業の復興過程を学んだり、また、2021年3月に地元で酒造りを再開した酒蔵メーカーを訪問したりと、地域の魅力を発見していく活動は、地域の全面的な協力を得て行われています。

水素技術やドローン技術など、最先端の次世代産業も企業やNPOなどの協力を得て学べます。海岸沿いにある「福島水素エネルギー研究フィールド」は、燃料電池などに用いられる水素を製造する世界最大級の施設です。小学5・6年生はそこを見学した後、自動車メーカーの出前授業で、水素自動車や水素バスを体験。小学3・4年生は「浪江町の未来について考える」マップづくりに取り組みました。中学1年生も燃料電池を活用したドローンで町内を撮影し、浪江の姿を広く発信する映像作品を制作しました。

双葉郡合同の「サミット」で 生徒も先生も交流

これらの成果は毎年、「ふるさと創造学サミット」で発表します。じつはこのふるさと創造学は、浪江町を含む双葉郡8町村内の学校で取り組まれているもので、地域や学校のそれぞれの特色を生かした探究的な学習をするのが共通点です。

毎年、12月に郡山市にある展示ホール「ビッグパレットふくしま」で、各校がポスターセッションで取り組みを発表し、交流を深める「ふるさと創造学サミット」が開かれてきました。

2020年度、21年度はコロナ禍のためオンライン開催となっています。2020年12月4日に開かれたサミットでは、オンラインで各校をつなぎ学びの成果を発表、交流も深まりました。小規模校であっても探究学習を深めるために必要なプロセスである「発表」や「振り返り」「新たな疑問を持つ」場を地域全体で確保しています。

子どもがいることで 町が元気になる

その他、双葉郡内の各中学校から集まった連合生徒会がオンラインで合同会議を開く、浪江町のPRソングの発表会で子どもたちがダンサーを務める、漁港の防潮堤に絵を描く「防潮堤アート」、海岸防災林の植樹祭への参加など、創造学以外にも多彩なプロジェクトに参加する機会や、生徒の自主的な活動が繰り返されています。

活動後の成果物もさることながら、探究学習は「プロセスが何より大事」と笠井教育長は言います。復興に向けて力を尽くす人々と直接コミュニケーションを取り、思いを聞くことが、これからの社会で求められる「1つの答えのないテーマ」に向き合う力を高めることに結び付くと考えるからです。

旧浪江中学校の卒業生の中には、ふるさと創造学を学び「将来、浪江のシンボルになるようなものを作りたい」と、建築デザインを学んでいる学生もいるそうです。「自分の未来を考え、どこに住んでいても、自分が浪江とどう関われるかという思いを、自分の中に育てていく学びになればいい」と笠井教育長は話します。

2017年に帰還が始まった時、当時、浪江中の校長だった笠井教育長は生徒を連れて避難先の二本松市から、浪江町を訪問したことがありました。その時、子どもたちを見た浪江町の大人たちが「あっ！子どもがいる！」と喜んだのを、笠井教育長は強く記憶していると言います。子どもたち、そして学校の存在は復興への大きな希望となっています。「これからもいろいろなチャンネルを活用して、新たなふるさととしての浪江町への思い『なみえ創成魂』を育み、様々なことに挑戦し続け、ふるさとや自分の住む地域を支えていってほしい」と、創造学の充実に期待をかけます。

ALTも頑張っています！

Royce Turnbull (なみえ創成小中学校ALT)

「浪江町の再建に向けて、可能な限り力になること、浪江町の子どもたちの人生やコミュニティ形成に関わることが自身の最優先事項だったので、浪江町で働くことを決めました。困難な中で、人々が仲間意識やつながりをもつだけでなく、町で『何かを楽しむことができる姿勢がある』、というのが素晴らしいです。この地域で素晴らしい経験をさせてくださっているすべての方々に感謝しています。」

